

聖書：ヨハネの黙示録 20：1～3

説教題：千年の間縛り

日時：2021年9月12日（朝拝）

ヨハネの黙示録第20章はいわゆる千年王国について語られている章です。この千年王国については意見が色々分かれていて、しばしば激しい論争がなされます。しかしそのもととなっている「千年」という表現は実は黙示録20章にしか出て来ません。2～7節まで各節1回ずつ、計6回のみです。聖書全体から見ればわずかです。ですからまるでどの立場を取るかによって、敵か味方かと考え、分派に至るような態度を取ることは慎まなくてはなりません。自らの確信は持つことができるなら持つべきですが、これを三位一体とかキリスト二性一人格といった聖書の他の根本教理と同じレベルで扱わないように注意する必要があります。

さてこの千年王国の理解のカギとなるのは千年期と主の再臨の関係です。大きく分けて3つの代表的な見方があります。一つは前千年王国説と呼ばれるものです。千年王国の前に主の再臨が起こるというもの。一般にプレミレと言われます。この立場に立つ人は黙示録19章と20章は時間的に連続していると見ます。前回見た19章11～21節ではキリストの再臨と獣や偽預言者のさばきが記されました。その再臨したキリストが、続く20章でサタンを縛って無力化し、聖徒たちとともに千年間地上を治める時代をもたらすと見るわけです。

2つ目の見方は後千年王国説と呼ばれるものです。こちらは千年王国の後に主が再臨すると見ます。先のプレミレに対して、こちらはポストミレと言われます。この立場を取る人は、主の再臨の前にこの世界には千年王国と表現される素晴らしい時代が来ると考えます。福音宣教によって全世界はいわばキリスト教化され、字義通りかどうかは別として千年間と表現されるキリスト教的繁栄の時代が来る。そしてその最後にキリストは再臨するというものです。

3つ目の見方は無千年王国説と呼ばれるものです。こちらは先のプレミレ、ポストミレに対して、打消しの「ア」を頭に加えてアミレと呼ばれます。この立場は地上に千年王国が起こるわけではないと考えます。この千年とはキリストの復活から再臨までのいわゆる教会時代全体を指す象徴的表現で、その期間、殉教者を代表とする信仰

を全うした聖徒たちが天においてキリストとともに治める王権にあずかっていることをこの黙示録 20 章は述べていると見ます。そしてその期間が終わる時にキリストは再臨する。千年の終わりにキリストが再臨すると見る点ではポストミレと同じですが、千年の統治が地上のことでなく、天上のことであると見る点で異なります。

さて今日は 20 章の 1～3 節のみを見ます。まずここで整理する必要のあることは千年と主の再臨はどっちが先かということです。先にも触れましたように 19 章後半でキリストの再臨が語られましたが、それに続く 20 章はキリストの再臨後の話と見るべきなのでしょうか。これまで見て来ましたように、ヨハネの黙示録は決して時系列に従って書かれていません。黙示録に書かれている順番はヨハネが見た幻の順番です。その幻は必ずしも時間的順序に並べられてはいません。時間的にいつのことかについては内容や前後関係から判断する必要があります。

内容に注目すると前回見た 19 章後半のさばきは、このあと 20 章 7～10 節に記されることと同じことのように見えます。19 章 19 節に「獣と地の王たちとその軍勢が集まって」主と主の民に戦いを挑むことが記されましたが、それは 20 章 7 節以降に述べられることと同じです。20 章 8 節で「地の四方にいる諸国の民」が召集され、聖徒たちに最後の戦いを仕掛けます。これはこれまでも見て来た通り、16 章 14 節や 16 節に記されたいわゆるハルマゲドンの戦いと同じです。16 章 14 節でも全世界の王たちが召集されて、戦いを挑むと言われました。それはまた 17 章 14 節とも同じです。19 章 17 節以降と 20 章 7～10 節が同じものであることは、両方ともエゼキエル書 38～39 章を下敷きとしていることから分かります。前回 19 章 17～18 節の言葉はエゼキエル書 39 章のゴグとマゴグに対するさばきの言葉を背景としていることについて述べました。そして 20 章 8 節にゴグとマゴグと出て来ます。ここからも両者は同じ出来事を述べているものと考えられます。とすとはっきりすることは何でしょうか。20 章 7 節にこの戦いは千年が終わる時に起こると言われていますから、千年期の方がキリストの再臨および最後の戦いより前に来るということになります。キリストが再臨してから千年が始まるわけではありません。千年の終わりにキリストの再臨および最後の戦いは起こるのです。このことからいわゆるプレミレの立場は除かれると考えられます。

では、千年の終わりはキリストの再臨の時と分かりましたが、千年の始まりはいつなのでしょうか。言い換えればサタンが縛られたのはいつなのでしょう。サタンがそ

れまでと違って自由に行動できなくなった時——それはまずこのヨハネの黙示録から考えると主の十字架と復活の時と言えます。20章1節に「また私は、御使いが底知れぬ所の鍵と大きな鎖を手にして、天から下って来るのを見た」とありますが、この底知れぬ所の鍵とは1章18節でキリストが「わたしは死とよみの鍵を持っている」と言われたことと同じことを指すと考えられます。死とよみに対する権威はキリストが十字架と復活を経て勝ち取られたものです。また3章7節にキリストを指して「ダビデの鍵を持っている方」と言われました。これは天国を開け閉めする鍵のことで、ある人を自由に天国へと導き入れ、ある人を拒む権威です。これもキリストが十字架と復活を通して勝ち取ったものです。次に9章1節で一つの星が天から地に落ち、その星に底知れぬ所に通じる穴の鍵が与えられたとありました。その星とは良い天使なのか、墮落した天使なのか議論がありますが、どちらにせよその鍵は「与えられた」と表現されていて、与えたのは主権者キリストです。底知れぬ所に通じる穴が開けられてそこから悪霊の働きが地に現れることが続いて述べられましたが、それでも9章4節に、額に神の印を持つ聖徒たちには害を加えることができないと言われていました。つまりサタンや悪霊はキリストの復活後もある種の活動は許されていますが、聖徒たちに本質的な害を加えることはできないという制限を加えられていました。そして最も重要な箇所として12章9節で悪魔は地に投げ落とされたと言われました。彼はそれまで持っていた権威をはく奪され、それまでに比べて著しく制限された状態に追いやられました。これはキリストの十字架と復活がもたらした一大変化を語っていたところです。今日の20章2節と12章9節の表現は非常によく似ています。まるで20章2節は12章9節を思い起こせ！と言っているかのようです。そして12章9節はキリストが十字架と復活を通してサタンに決定的に勝利したことを語っていました。とするなら、20章2節の「千年の間縛り」とは、キリストの十字架と復活以降のサタンの状態を指していることになります。

今は黙示録の内部でのみ考えましたが、同じことは福音書の中でイエス様が繰り返し語られたことでもあります。イエス様はマタイの福音書12章28節で「わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです」と言われた後、次の29節でこう言われました。「まず強い者を縛り上げるのでなければ、強い者の家に入って家財を奪い取ることが、どうしてできるでしょうか。縛り上げれば、その家を略奪できます。」ここで「縛る」と訳されている言葉は、今日の20章2節の「縛る」と訳されている言葉と同じです。イエス様は

ここでご自身がサタンを縛り始めていることについて語っておられました。またルカの福音書10章18節でこう言われました。「サタンが稲妻のように天から落ちるのを、わたしは見ました。」あるいはヨハネの福音書12章31～32節でこう言われました。「今、この世に対するさばきが行われ、今、この世を支配する者が追い出されます。わたしが地上から上げられるとき、わたしはすべての人を自分のもとに引き寄せます。」つまりこれまで支配権を持っていたサタンが追い出されて、今や多くの人がイエス様のもとで救いを得るようになると言われました。あるいはコロサイ人の手紙2章15節でサタンについてこう言われています。「そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。」これも明らかにイエス様が復活によってサタンに勝利し、今やサタンを縛っているという内容です。ですからサタンの縛りはキリストの復活からということになります。

しかしある人たちはこの見方に反対します。この黙示録20章で言われていることはそんな程度のことではないと。3節でサタンは底知れぬ所に投げ込んで鍵をかけられ、その上、封印されたとも言われている。つまりそこに密閉され、何の活動もできない状態にされたということである。しかし今現在、悪魔は活動しているではないか！確かにキリストの十字架と復活によってサタンの敗北が決定的になったとは言え、まだまだ彼は力強く働いている。「吼えたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っている」とペテロの手紙で言われているし、エペソ書でも「私たちの格闘は、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです」と言われている。決して無力化されてはいないと。しかしこれまでの箇所と同様、この3節も私たちは字義通りに取り過ぎないように注意すべきだと思います。これらはいくまで象徴的表現であって、その意図するところを汲み取るようにしなければなりません。千年という数字も、これまで黙示録を読んで来た人なら、文字通りの千年とは取らないでしょう。またサタンは竜として描かれています。本当に竜の格好をしているわけではありません。サタンは霊的存在です。ですから物質的な鎖で縛ることができるわけでもありません。底知れぬ所についても、霊的存在であるサタンをある物理的空間に押し込めて、この世の事柄に一切関われないようにするという意味ではありません。ここは全体としてキリストがサタンの上に絶対的な権威を持っているということをおっしゃっているのでしょう。

それにこのサタンの縛りにはある特別の目的のあることがはっきり書いてあります。3 節の「諸国の民を惑わすことのないように」という部分です。この惑わしとは具体的にどんなことでしょうか。7 節以降にサタンがやがてこの縛りから解かれて活動する時のことが述べられますが、8 節に「地の四方にいる諸国の民を、・・惑わすために出て行き、・・彼らを召集する」とあります。つまりこの惑わしとは最後の戦い、ハルマゲドンの戦いを引き起こすためのものです。つまりイエス様はそのことを今はさせないようにという目的のもとにサタンを抑え込んでいる。ですからサタンは何も活動できないのではないのです。現に色々しています。しかし神が定めた日より前に最後の戦いの日を来たさせることがないように、それに向けて諸国の民を惑わすことがないように、そのための縛りをかけているところは語っているだけなのです。

最後にもう一つ気になる言葉として3 節の「これ以上」は何を意味するのでしょうか。キリストの十字架と復活によって本当にこれほどの大きな変化が生じたのでしょうか。これについては次のように考えられます。2 節にサタンのことが「古い蛇」と言われています。これはサタンが蛇として出て来る創世記 3 章を思い起こさせます。あそこでサタンはアダムとエバを惑わし、人間を祝福の道から逸脱させました。サタンはそうしてこの世界に対する神の目的を捻じ曲げました。神はその後、アブラハムを通してイスラエルを起し、イスラエルを通して全世界に救いの光をもたらそうとしましたが、旧約時代イスラエルはその使命を十分に果たすことはできませんでした。時々光を放つ時期があったとは言え、むしろイスラエル自身もサタンに惑わされてその光を暗くさせられ、とても全世界の隅々まで光をもたらす使命に生きることはできませんでした。そのため、旧約時代、イスラエルを除く全世界は霊的な暗闇の内に置かれ、サタンが諸国を惑わし、その上に権威を持つという状態が続いていたわけです。しかし最後のアダムであるキリストが地上に現れて完全な歩みをささげ、十字架と復活を通して悪魔に勝利しました。サタンは地に投げ落とされ、今やイエス様はご自身と結ばれた者たちを通して全世界に救いの光をもたらすことのできる方となりました。ですからイエス様はマタイの福音書 28 章 18 節で「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています」と復活後に宣言され、いわゆる大宣教命令を語られました。ここにおいて「これ以上、諸国の民を惑わすことのないように」という新しい状態が生じたのです。

もちろん黙示録 9 章で見た通り、サタンはこの世を呪うため様々な方法で今の世で

も働いています。しかし9章4節で見た通り、額に印を押された救いの民に手をかけることはできません。この額に印を押された人とは、これから救われる神の民も含む表現と考えられます。ですからサタンは以前と同じように諸国の民を惑わし続けることはできなくなったのです。これによって「御国の福音は全世界に宣べ伝えられ、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます」（マタイ 24 章 14 節）とイエス様が言われた神の御心が実現されることとなったのです。救われるべき最後の一人が救われるまでは、それを妨げようとするサタンの働きは引き止められています。それまでの間にサタンによって諸国の民が一致して最後の戦いを引き起こすことがないようにと。

以上から今朝学ぶことは何でしょうか。それはまずイエス様の復活以降、この世界はそれ以前までとは大きく状態が変わったということです。キリストがサタンに勝利し、今や「サタンを縛っている」と表現されるような状態をもたらされた。それまで諸国の民を惑わしていたサタンを鎖につなぎ、今や福音の光を全世界に広めることのできる時代を来たせられた。もちろんだからと言って福音宣教が容易になったわけではありません。サタンは様々な仕方で妨害します。しかし今やキリストが圧倒的な権威を持っています。ですからイエス様はマタイの福音書 16 章 18～19 節でこう言われました。「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつなぐれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます。」ここは一般に福音宣教における御国の鍵と呼ばれるところです。イエス様はこのように今や、よみの門、死の門、悪魔の力も真の意味で邪魔はできないと確言しておられます。そのことを受け止めて、私たちはこの時代、みことばを宣べ伝える歩みに励まなければなりません。使徒の働きを見ても、今日の私たちの経験を通して、実際には困難がたくさんあります。しかしだからと言って、まるでサタンが主権者であるかのように考えるはならないのです。まだ最後の段階に入っていないければ、今日の箇所によれば、今はサタンが縛られている期間です。まだ福音宣教に邁進すべき期間です。そのことを見て取って、今の時代をそのように捉え直して、福音を一層伝える歩みへと励まされたいと思います。

しかし一方で最後の時が来ることも今日の箇所は述べています。3 節最後に「その後、竜はしばらくの間、解き放たれることになる」とあります。ここには英語の must

に相当する「そうでなければならぬ」という言葉が入っています。つまりそれは神のご計画によって必ず起こることです。いつその時代に入るかは分かりません。私たちが生きている間に始まるかもしれません。サタンは縛られている今の時でも十分恐ろしいのに、解き放たれたら一体どんなことになるだろうと末恐ろしく思うかもしれません。サタンはあらゆる力を振り絞って最後の戦いに出て来るでしょう。しかし続くみことばは、恐れるに足りないことを教えてくれます。大切なことは主の御言葉に聞き、その信仰に立って歩むことです。主はご自身に信頼する者たちに確実な救いを用意くださっています。そのことを続くみことばに聞いて受け止め、主を信じ、むしろ黙示録の最後に書かれるように、早くにその日を来たらせてくださいと祈って、主にお従いする歩みへ導かれて行きたいと思います。